



清水六兵衛歴代展

京の陶芸・伝統と革新

特集：館長のご挨拶
清水六兵衛歴代展
予告：深沢幸雄銅版画展／遠藤健郎絵画展
義経展
連載：ボランティア日和／展示室で考える

新玉の年のめでたさ

めぐり来る新玉の年をふたたび迎えた新鮮な気分は、格別にめでたいものです。毎年のごですが、この一年がより良い年となりますようにと、祈るばかりです。本年は11月に開館10周年の記念日を迎えることとなります。美術館としての基礎固めがようやく成ろうかという最終コーナーにさしかかって、館員一同、日々奮闘しております。いっそうのご指導、ご鞭撻をいただければ幸いです。

さて、新年早々皆様をお迎えする展覧は、昨年末から引き続いて開催中の「清水六兵衛歴代展」です。その副題に「京の陶芸・伝統と革新」とありますように、関東の人間にはつねに憧れやむことのない京のみやびの真髄を愛で、2世紀半にわたる長期間、8代にわたって受け継がれ陶芸の家、「陶師」の歴史と今日、さらには明日をまで見渡そうという、まことに意欲的な展覧となっています。7階と8階のギャラリー、そして1階のさや堂ホールをも使って、全館、陶磁器の作品に埋め尽くされていますので、焼き物ファンにはまたとない目の悦楽を味わっていただけることでしょう。さらに有り難いことには、代々のご当主が交流を結んだ画家たち、たとえば円山応挙や呉春、あるいは浅井忠の絵付けが楽しめたり、富岡鉄斎や神坂雪佳の名画そのものに出会えたりと、私のような絵好きにも思いがけない贈り物が用意されています。昨秋の「岩佐又兵衛展」同様、本館単独の企画、開催ですので、どうぞお見逃し無きように願ひ上げます。

引き続きまして、1月29日から2月27日まで、「遠藤健郎絵画展」および「深沢幸雄銅版画展」と題して、千葉市にゆかり深い現役の美術家お二人の回顧展を開かせていただきます。風刺と諧謔の味付けが鋭く濃い風俗画の名手遠藤健郎氏と戦後を代表する版画家の深沢幸雄氏との、それぞれ初期から近作までの代表作約200点ずつをご披露するものです。

当館の基本方針のまず第一に掲げられるのが、今回の展覧に代表されるような「房総ゆかりの美術」です。地元房総の美術、ひいては文化の歴史をたずね、明日の創造の種を提供することは、私ども千葉市美術館の運営にたずさわる者の当然の責務でありましょう。冒頭にも申しましたように、開館後10年近く経過してようやく、そのあたりにも十分な配慮を加え、力点を置く余裕が出来てきました。千葉の美術の「今」にも関心をつないで、なおいっそう地に根を生やした活動を継続していく所存です。その最初の試みとして、現役の大家お二人に登場していただいた次第です。ご期待下さいますように。

私の座右の一書にアンドルー・ワイル博士の『癒す心、治る力』という本があります。現代アメリカ人の生き方を根本から問い直し、人間の自発的な(スポンテニアスな)治癒力を高めることによって病や不健康な日常の苦しみから解放されようと訴えた、医学書でもあり一種の文明批評書でもあります。そのあるべき「生き方」として、食生活や呼吸法などの改善をすすめるほかに、こころよい音楽を聴くことや好きな美術を鑑賞することの功德についても言及しています。いわゆる「心の癒し」は、私たちが思っている以上に身体の健康にも良いのだそうです。

ここからは我田引水になりますが、美術館にしげしげと足を運ぶことは、皆様の心と身体の健康増進に役立つというわけです。病気の回復にも効果抜群であると、ワイル博士は強調しています。この一年が、健康で、幸せな年となりますように、美術館へのご来館を心よりおすすめし、お誘ひ申し上げます。

館長 小林 忠

「清水六兵衛歴代展」あれこれ

「清水六兵衛歴代展」について、なぜ千葉市美術館で開催したのかについて、よく訊かれる。面白がってくれる人もいれば、どうも解せない、といった表情が最後まで消えることなくそのまま別れる人もおり、さまざまである。

すでに御存知の方も多いと思うが、ここでもう一度当館の活動の方針を記せば、

1. 千葉市を中心とした房総ゆかりの作家・作品
2. 日本の文化の核を形成する近世以降の美術品
3. 現代美術

を大きな柱としている。

開館以来、この方針に沿った展覧会の開催や作品の収集を行ってきたが、これまで近世から現代までをひとつのテーマによって紹介する企画展示を行ったことはなかった。コレクションを基にした、いわゆる所蔵作品展では近世と現代の美術品を一緒に展示する、「取り合わせ」の展示はたびたび行い、この試みは来館された方々に一定の評価をいただいているものの、この手法では作品の選択や組み合わせの点でどうしても歴史の流れを客観的に把握・紹介することは難しく、担当した者にとっては展覧会終了後、展示した作品どうしを独りよがりのテーマ設定で強引に結びつけてはいなかったが、後々まで気がかりになる場合も多い。テーマの設定は独りよがりの方が面白い、



初代六兵衛 右《素焼湯沸》1771-99年(江戸中期)
左《白泥二重涼炉》1771-99年(江戸中期)



二代六兵衛
《兩室灰器》
1811-60年(江戸後期)

という意見もあるけれど、これは展示した作品にも、来館して下さった方々にも失礼である。

そんなことから、日本の近世から現代をたどる当館ならではの展示会の可能性について考えた結果、今回の展示会となった。

欲を言えば、当館所蔵の絵画のなかから初代と交流のあった圓山應擧や松村呉春、あるいは七代を襲名した清水九兵衛氏と共に長く現代美術の世界を歩んでおられる堂本尚郎氏の作品などを選び出して展示することができれば良かったと思う。残念ながら、これは会場面積の制約の都合で出来なかった。

*

展示会の準備中、時代の推移を踏まえる目的で年譜を作っていた時、

これは千葉市美術館だからこそ行える展示会だと、実感した。

多くの公立美術館では近代以降の美術を主に扱うため、江戸時代に関する参考図書が乏しい場合が多い。当館ではそんな心配はないし、それ以前にスタッフにしてからが小林館長以下近世美術のエキスパート揃いである。加えて、七代と当代に関係する海外の現代美術の動向については、席の後ろを振り返って同僚に教えを乞うことができた。

困ったことは、清水家の活動の舞台となった京都という土地ならではの微妙なニュアンスが他所者には解り難いという点だったが、これは今回監修をお願いした中ノ堂一信氏が生粋の京都人であったために御専門である陶磁史はもちろんのこと大いにその恩を受けた。結果的に、展示会担当者の環境は、準備期間が短いものでありながら、望みうる最良のものとなった。

意外だった事は、七代が沖繩戦から生還して戦後一時期勤務していたという、市内・稲毛にあった復員庁の記録が市や県では検索できなかったことで、結局霞ヶ関に問い合わせるより他なかった。私の調査が悪かったことを差し引いても、負けいくさの処理機関についての資料が調査し難いことは、日本人の歴史意識を垣間見ることができたようで可笑しかった。

いや、そんなことよりも清水家の皆様方には本当にお世話になった。ここで、改めて感謝の言葉を記しておきたい。

*

肝心の清水家歴代の作品について記さねばならない。

出品作のなかには御本手などの半島に範を得たやきものや、あるいは南蛮・焼締など東南アジアに源のあるものが多い。華麗というよりも、わび・さびに通ずる味わいがある。そこで驚かされる点は、半島や東



五代六兵衛《新雪窯花瓶》1954(昭和29)年



六代六兵衛《赤三島蓋物》1968(昭和43)年
京都府立総合資料館蔵(京都文化博物館管理)



八代六兵衛《Space Receptor-2004》2004(平成16)年

南アジアから流入したやきもの、しかも素焼という意図的な変化が困難なやきものを、見事に柔らかく消化していることである。

その端的な例が江戸時代後期の作である二代六兵衛の《南蛮灰器》だろう。ざっくりとした土味を持っていながら、彫り込みは注意深く土くずが取り除かれており、全体のたたずまいは本歌とはちがいでどこか柔らかかみを帯びている。

角が取れて、円うなった

とは、こんな作品を指しているのだろう。

初代以来、日本にもたらされたアジアのやきものをみごとにこなし(消化し)てきた清水家の歴代は五代・六代になって近代的な陶芸家を目指すことになるのだが、五代の晩年、隠居してからの作はどうであろう。《爛漫花瓶》(1953)といったあでやかな作品がありながら、同時期に《焼締壺》(1952頃)のような作品が制作されている。美術(展)史から見れば作者の本領を前者に見る向きが圧倒的だけれども、私はむしろ後者にこそ五代の生地が現れているように思われてならない。そうでなければ、晩年の境地とも言える《新雪窯花瓶》(1954)が成立するための基盤は見つからなくなってしまう。同様のことは六代にも当てはまることであって、晴れの舞台である展示会(日展など)出品作も良いけれど、半島に源流のある意匠を見事に和様化した《赤三島蓋物》(1968)などの作例も捨てがたい。

それでは、現在彫刻家として活躍する七代と、当代である八代六兵衛の両氏は、先人から何をうけついでいるのだろうか。詳しくは、今回の展示会図録に執筆をお願いした諸山正則氏の論文に直接当たっていただきたいが、会場を巡っての感想を記せば、お二人とも素材を扱う手付きのしなやかさ、やわらかさには確かに清水家歴代の精神が息づいていると思う。

ともあれ、来館された皆様方には師走・新年の時期、のんびりと京の感性に浸っていただきたいと思っております。

(学芸員 藁科英也)

清水六兵衛歴代展 京の陶芸・伝統と革新

2005年(平成17)1月23日(日)まで
10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで
(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

1月10日(月・祝)は開館、翌11日(火)休館

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 240(200)円

()内は団体30人以上の料金

深沢幸雄銅版画展

深沢幸雄は1924年、山梨県南巨摩郡増穂町に生まれました。東京美術学校に進み、はじめ油彩画を志しますが、東京大空襲で受けた傷がもとで1951年以来右膝関節を病み、歩くことさえままならない生活を強いられます。油絵を断念して銅版画に転向、駒井哲郎や浜田知明に影響されながらも、独学で制作を始めました。二十代から三十代にかけての6年もの時間を、重いコルセットとともに暮らす辛さは想像するにあまりありますが、こうした不自由な出発が、深沢を飽くなき版上の冒険へと駆り立てたとも言えるでしょう。メゾチントやエッチング、アクアチント、ドライポイントなどを次々に修得しては独自に究め、またそれらを併せることで多彩な表現を獲得、銅版画の可能性を大きく広げました。深沢が作り出す画肌は時にざらつき時に滑らかで、薄い銅の板から生まれたとはとても思えないほど立体的で表情豊かなものです。若い時期の試行錯誤と実験の数々から、深沢はマチエールを自在に操る高度なテクニックを手に入れました。

最初期には、人間という生き物の暗部をえぐりだすような重く痛切な描写が多く見られます。この頃作家は思うようにならない身体を抱えつつ、自らの作品が銅版画として成立しているのかどうか常に迷っていたと言いますが、その不安の強さが緊張感に転じて画面を引き締め、見るものを惹きつけます。1963年にはかねて憧れていたメキシコへ版画講師として招かれ、マヤ・アステカの古代文明にふれて転機を迎えます。プリミティブなものへの開眼から、作品は野太い形態と鮮やかな彩色、大型のダイナミックな構成へと変貌を遂げました。そして悠久の人類史や現代人の心象風景を緻密に描く時期を経て、近年では若き日の懐疑は姿を消し、人間という存在をまるごと肯定するような温かな画面に移行しつつあります。その表現世界は国内のみならず海外でも高い評価を受け、戦後の日本を代表する銅版画家として今もなお新たな挑戦を続けています。



窓 1972年 当館蔵



ダンテ『神曲』《地獄篇》より ブルネット・ラティエーニ 1956年 当館蔵

1950年から長く市原市鶴舞に住み、はじめての個展も55年、当時千葉市にあった国松画廊で開かれました。国松画廊は戦後、自身画家でもあった国松伽耶(本名秀二郎・1906-75)が開いた画廊で、県内で最初の画廊と言われています。作家にとってゆかりの深い千葉市で開かれる本展は、千葉市美術館の所蔵作品を中心に版業の初期から近作までを網羅、さらに書やガラス絵もあわせて約180点から深沢幸雄の全貌をたどります。高度な技に支えられた、詩情あふれる豊穡な作品世界をご堪能ください。

(学芸員 西山純子)

宮沢賢治《春と修羅》より ローマンス 1986年 当館蔵



深沢幸雄銅版画展

2005年(平成17)1月29日(土) - 2月27日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで、ただし2月11日(金・祝)を除く
(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金

同時開催の「遠藤健郎絵画展」もご覧いただけます

【講演会】「僕と版画とメキシコと」

2月13日(日) 14:00 - 11階講堂にて

講師：深沢幸雄

かつて当館のスタッフが、来館予定の米国人のお客様と勘違いしたという遠藤健郎(1914 -)氏は、確かにご高齢の老人にしては背も高く、鼻筋の通った顔立ちで、洒落た姿の方です。長く千葉市にお住まいで、展覧会の準備を通してお目にかかることも多くなりましたが、ややブラックなユーモアがあり、皮肉っぽくもあり、でもいつもどこかに温かいまなざしを持っていらっしゃるようにお見受けしています。常に身近な風俗を題材として活写してきた遠藤氏の作品には、そのような人柄が最もよく表れているようにも思います。現代では画家が画壇に属さずにやっていくということは大変なことだそうですが、自分の視点を貫く仕事を、長い間この千葉で続けられてきたということは、やはり画家として信念あつてのことでしょうし、だからこそその作品は個性的です。

美術館では戦争直後の人々の姿を描きおこした「瓦礫の街から」のシリーズ、そして「戦後は終わった」と名づけられた昭和30年代頃の日本の風俗を滑稽に描き出したシリーズなどを中心に所蔵していますが、時に辛辣で深刻であり、時に愛情に満ち、ユーモラスであり、戦後から現在にいたる日本社会の様子が、独自の視点からいきいきと描かれています。軽妙なタッチで描かれた作品類のをご自分でカリカチュア(いたずら絵)とおっしゃっていますが、私自身はそのような絵が好きで、楽しませていただいているところです。



遠藤健郎 雨の日の候補者 水彩、ペン、紙 当館蔵



遠藤健郎 待ちくたびれた亭主 ペン、墨、紙 当館蔵

遠藤健郎絵画展 — 戦後は終わった



遠藤健郎 白いにぎり飯 油彩、キャンバス 当館蔵

遠藤氏は大正という時代に生まれました。大正といえば、明治と昭和の狭間にふと生まれた個性的で自由な表現のある、美術にとっては短くても慈しみたい時代です。竹久夢二、あるいは当館で1999年に展覧会を行った甲斐庄楠音などの画家を思いだしてみてもよいでしょう。遠藤氏が大正の自由な空気を吸って少年期を過ごしたこと、それにもかかわらず昭和に入り、戦争の渦中に青年・壮年時代の一時期をささげなければならなかったことは、その後の作品の精神を決定したように思われます。

大戦直前に東京美術学校油絵科の学生、戦中の美術書出版の仕事、美術教師、徴兵そして敗戦、千葉市役所での勤務といった様々な経験を通して、鋭い人間観察力が養われ、心動かされるごとに筆を走らせたものでしょう。絵を描くことが好きでたまらない、これこそ幸せの遠藤氏は、絵を描くこともままならぬ時代を抜けて、堰を切ったように様々な立場の人々を描き出していったようです。

戦後より残された多くのスケッチは、のちに遠藤氏自身の巧みな文章と共にいくつかの画文集にまとめられ、また版画や油絵に描きおこされています。自伝的な出版物もあり、その人生と作品への興味はつきません。絵と文章を通してその活躍を振り返り、同時に戦後から今という時代の姿に目を向けることは、今の私たちにとっても必要なことのように思います。

展覧会は、千葉市美術館の所蔵作品を中心に、近作も含め主要な作品200点ほどによって構成されます。期間中には講演会も予定され、作家の言葉を直接聞くこともできます。是非ご来場下さいませようお待ちしております。

(学芸員 田辺昌子)

遠藤健郎絵画展 戦後は終わった

2005年(平成17)1月29日(土) - 2月27日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで、ただし2月11日(金・祝)を除く
(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金

同時開催の「深沢幸雄銅版画展」もご覧いただけます

【講演会】 「千葉に暮らす 千葉を描く」

2月11日(金・祝) 14:00 - 11階講堂にて

講師：遠藤健郎

「遠藤健郎先生にお話を聞く会」について

私たち美術館ボランティアの多くが、初めて遠藤健郎先生の作品に接したのは、一昨年の夏に開催された「2003年アートの旅」展の《赤い襟巻の少女》でした。少し暗い展示室の中に様々な顔の作品がならんでいました。その中でこの作品は白い頬とつぶらな瞳そして赤い襟巻がとても印象的でした。ある日、ボランティアの一人がこの作品の前でギャラリートークをしていると、背の高い老紳士が「あれ、これは僕の作品だ」とお声をかけてくださったそうです。実はその紳士が作者である遠藤先生でした。そのことから私たちボランティアは、先生が市内にご在住で、現在も絵画教室のご指導をされていることなどを知りました。



遠藤健郎 赤い襟巻の少女 油彩、カンヴァス 当館蔵

次に先生の作品に出会ったのは、その年の秋に開催された「千葉美術散歩」展でのことでした。油彩画の《赤い襟巻の少女》とは全く異なる、風刺の効いた軽いスケッチ風の作品に魅了された私たちは、先生を囲んで、ぜひ様々なお話を伺いたいと思いました。こんな私たちの思いを学芸員さんに伝えると、思いもかけず、「遠藤先生にお話を聞く会」を開催しようということになりました。

初めてお目にかかった先生はツイードのジャケットを粋に着こなされ、作品からうかがわれる洒脱さと鋭さを合わせた素敵な紳士でした。(女性の生徒さんが多数いらっしゃるというのも納得!) 当日は先生ご自身や作品のこと、戦前から戦後にかけての千葉市内のこと、芸術家達のことなど話題多岐にわたりました。

その中からいくつかご紹介します。先生は陸軍将校であった父の仕事のため、小学生の時に千葉市に越してこられたそうです。そして旧制千葉中学(現・県立千葉高等学校)から東京美術学校(同東京芸術大学)油絵科に進まれました。千葉中学在学中に、明治・大正期に多くの画人を指導し、わが国近代洋画史に多くの功績を残した堀江正章師の最後の教え子として絵の指導を受けられました。また美術学校では藤島武二氏に指導を受けましたが、黙って教室に入ってきて学生の横に立ち、左手を出し(パレットを貸しなさい)、次に右手を出し(筆を貸しなさい)、黙って絵を塗りつぶしたそうです。戦後、八日市場中学校への通勤の車中でのスケッチをもとに多くの作品が生まれました。

今回、遠藤先生の絵画展が開催されることになり、私たちボランティアも図録作製のお手伝いをさせていただきました。改めて、先生の作品の前に、この一昨年秋の満ち足りたひと時を思い出しております。

美術館ボランティア 中村しのぶ

ボランティア日和 episode 6

いつもニコニコしながら、「ほら、ここ。見て～」と小さな発見を分けてくれる木下さんの登場です。

千葉市美術館で一年半の間、ボランティアとしてギャラリートーク、小中学生の鑑賞教育等に、参加させていただきました。夫々の展覧会ごとに思いがけない発見と驚きがありました。

7～8月に開催された「太陽と精霊の布」展では、中国少数民族の民族衣装の数々が展示されました。日本の原風景を思わせる土地に暮らす女性達の、緻密な気の遠くなる様な手仕事によって、作られた衣服は、母から娘へ受け継がれ、繕いの跡にも心がこめられている様な気がしました。さぞかし暖かい着心地がすることでしょう。トークの後、すてきなバッグを肩にかけた女性とお話しました。お母様の古い刺繍の帯をバッグに仕立てなおして使っておられるとの事でした。最近すぐになんでも手に入る生活の中で、忘れていた手仕事の楽しさを、ふと、思い出しました。この展覧会にピッタリのお話でしたので、忘れられません。お客様とのほんの小さなふれあいは、心に残りました。

10～11月にかけては「岩佐又兵衛展」の関連イベントとして、絵巻物「山中常盤物語」の記録映画が、上演されました。全12

巻の絵巻が1巻から順に圧倒的な迫力で迫ってきます。太夫の浄瑠璃の語りと、太棹の三味線の音色と、又兵衛の絵巻が一体となり画面に引き込まれ、今まであじわった事のない感動をおぼえました。

美術館には、色々の楽しみかたがあります。私もたくさん楽しませていただきました。芸術の「秋」は過ぎ季節は冬になりますが、美術館にお出かけになりませんか。

美術館ボランティア 木下信子



千葉市美術館開館10周年記念 平成17年NHK大河ドラマ「義経」関連企画

義経展 - 源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝 -

源義経は、京の都を追われて奥州に逃げ延び、文治5年(1189)31歳の若さで自害しました。その日から始まった「義経伝説」は、源平争乱がひとまず鎮静した鎌倉期以降、人々の回想と叙述の対象として確立し、長い年月をかけて各地の伝承や物語、浄瑠璃・能・歌舞伎などの主人公として虚像実像入り乱れ、様々に変容してきました。平成17年のNHK大河ドラマは、宮尾登美子原作の『平家物語』を基に、「義経」と題して1年間放送します。

この展覧会では、大河ドラマ「義経」の放送と連動して、岩手・京都・奈良・岐阜・山形などの地に残る義経ゆかりの遺品や主要な合戦場面を描いた絵画、同時代に生きた人々の肖像画や書、さらには平安末期の文化を象徴する美術工芸品などで構成し、平家一門の偉大なる指導者清盛と若き源氏のスーパースター義経の足跡を東西にたどる大規模な展覧会です。



国宝 平家納経 法華経信解品第四 平安時代 厳島神社蔵

第1章 源氏と奥州・みちのく

第2章 平氏一族の栄華

第3章 牛若丸から義経へ

第4章 栄光の源平合戦～一の谷から壇の浦まで～

第5章 東下りの道

第6章 奥州藤原氏と平泉の黄金秘宝

第7章 滅びし者への愛惜

主な出品作品 国宝・平家納経(厳島神社)

国宝・源義経自筆書状(高野山金剛峯寺)

重文・赤漆塗重藤弓(源為朝奉納)(大山祇神社)

義経記図屏風(馬の博物館)

中尊寺1/5金色堂(中尊寺)

前田青邨「洞窟の頼朝」(大倉集古館)



月岡芳年 芳年漫画 舎那王於鞍馬山学武術之図 当館蔵

義経展 - 源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝 -

2005年(平成17)4月5日(火) - 2005年(平成17)5月15日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 1000(800)円

大学・高校生 700(560)円

中・小学生 300(240)円

()内は前売および団体30人以上の料金

第36回千葉市民美術展覧会

千葉市の美術振興をはかるため、市民芸術祭の一環として、会員作品及び公募入選作品を一堂に展示します。今回は36回目になります。日本画・洋画・彫刻・工芸・書道・写真・グラフィックデザインの7部門の中で、力作が出品されます。

2005年(平成17)3月5日(土) - 2005年(平成17)3月25日(金)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(最終日は5時まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 無料



市民美術展覧会での展示の様子

